

Ruthie Foster 初来日公演は 2009 年 3 月 26 日 Thumbs Up (横浜)、27 日 Cay (東京・青山)、28 日 磔磔 (京都)、29 日 得三 (名古屋) の 4 公演だった。Ruthie 側からライブ・レコーディングの許可が下りたのは彼女が来日する約 2 週間ほど前で、4 公演のうち 2 公演のみという条件。Hoy-Hoy Records としては 4 公演すべてをレコーディングしたかったが、すでに 29 日は他のアーティストのレコーディングが入っていたために Ruthie 側からの条件をすんなりと受け入れることにした・・・とはいつても、弱小 Hoy-Hoy Records にとってはレコーディングさせていただきだけでも光栄なこと。Ruthie Foster のライブ・パフォーマンスをできるだけたくさん録音したい気持ちを抑えながら、横浜と京都を選ばせていただいた。

Thumbs Up は Hoy-Hoy Records がこの 1 年、ホームのように録音させていただいているところ。録音も販売もやりやすい。それにどのアーティストの公演でも一番の盛り上がりを見せる。磔磔はわたしが中学生時代から通っているライブ・ハウス。しかし、この 10 数年は足を運んでいない。もちろん Hoy-Hoy Records としてははじめての録音となる・・・が、昔はテープ・レコーダーを持ち込んで (未許可で) よく録音していた。

磔磔は特別な場所だ。上田正樹とサウス・トゥ・サウス、そのギタリストだった有山じゅんじや憂歌団、Hoy-Hoy Records ではおなじみの金森幸介のライブを 10 代の頃のわたしはよく観に来ていた。毎年、ライブはじめは磔磔からという有山じゅんじは「磔磔ほど音のいい場所はない」といつている。彼は 93 年 7 月に磔磔でライブ・アルバムを制作、そのときわたしは楽屋代わりに使われる 2 階につづく階段の途中でずっとライブを観ていた。磔磔のなかでもこの階段の途中が一番いい音で聴くことができる。

磔磔が特別なのは、そこが日本におけるブラック・ミュージックの「聖地」でもあるからだ。少なくともわたしはそう思っている。磔磔で観た O.V. Wright や Otis Clay は忘れられないし、このときのライブが今のわたしの音楽を聴く上での基盤となっていることは確かだ。

わたしたち Hoy-Hoy Records が京都に到着したのは 28 日当日の午後 4 時過ぎだった。Ruthie たちは別の車で移動していて、彼女たちが磔磔に着いたのは 5 時をまわっていた。開場が 6 時半だったのでリハーサル時間は 1 時間も無い。これまでに観た 2 回のショーから入念なリハーサルをするタイプのバンドではないので 1 時間もあれば充分だとは思ったが、機材のセッティングも楽器のチューニングもしていない状態で、リハーサル時間は案の定、それらのことを片付けただけでタイム・アップ。彼女たちはサウンド・チェックよりも磔磔の壁にある過去の演者の名を見て「Oh!」と声を上げているほうが楽しそうだった。

開場と同時に次々と観客が入ってきた。横浜や東京よりは少ない、と聞いていたが、いつの間にか磔磔はいっぱい。立ち見客まで出るほどだった。まだ春には早すぎる京都の夜だったが、磔磔内はムンムンとしていた。開演時間を 10 分ほど延ばしてからバンドはゆっくりと階段を降りてきた。客席を通り抜けた Ruthie はキーボードの前に座った。この夜は「Stone Love」がオープニング。次の曲で Samantha のハイハットが心地よく響いている。この「Light Up the World」で今夜の成功は約束されたようなものだった。Ruthie の表情が一変し、その様子が階段のところで聴いているわたしにも伝わってきた。のびのびと歌い出した Ruthie に観客が引き込まれていく。バンドと観客、両者の集中力はその後途切れることはなく、サウンドは磔磔の煤けた壁に溶け込んでいった。

Ruthie Foster 自身も日本の観客に馴れてきていたのかもしれない。きっと彼女は観客の特性をつかみとるのがうまくて早いのだ。ソングライター、ギタリスト、シンガーなどの肩書きを持つ Ruthie だが、彼女が本当にその才能を発揮するのは観客と場所の特異性をいち早く読み取るパフォーマーとしてのものなのかもしれない。Ruthie Foster Family Band と磔磔という空間、そこを埋める観客数と音の数、そのどれもが一致した。Thumbs Up のときも稀に観るライブと思ったが、この日はそれ以上のマジックがわたしたちの目の前で起こった。

\* \* \*

Ruthie Foster は Texas 州の南東部にある Brazos Valley で生まれ、同州 Gause で育ったアフリカン・アメリカン。幼少の頃にラジオから流れるゴスペルとブルースに魅了された Ruthie は 14 歳で地元聖歌隊のソロリストとして活躍。自身の人生が音楽を中心に廻っていくことを確信したという。コミュニティ・カレッジに進んだ彼女はオーディオ・エンジニアを学ぶ一方で、ブルース・バンドを結成。クラブやバーでの演奏を繰り返した。卒業後、海軍に入隊。そこでも Ruthie はバンドを結成し、ファンクやポップスにも傾倒していく。すでにカントリー・ミュージックや (一般的にいわれる) ブラック・ミュージック以外の音楽からも影響を受けていた彼女だが、おそらくはこの頃に得たスタイルが今日の Ruthie Foster の音楽性を形成したのだろう。最新アルバム『the Truth According to Ruthie Foster』をはじめ聴いたとき、Gwen McCrae に代表されるようなマイアミ・ソウルにある軽やかさをわたしは感じていた。この作品がサザーン・ソウルの名門スタジオ、Ardent Studio で録音されたものだと信じ難かった。ちなみに Ardent Studio は Stax Records がホームとしていたスタジオだが、忌野清志郎の

『Memphis』もそこで録音されている。

海軍除隊後、Ruthie は New York へたどり着き、フォーク・シーンにどっぷりとつかることになる。1990 年前後のことで、the First Folk Magazine など New York にもかすかにフォーク・シーンが残っていた。きっと Ruthie に Tracy Chapman の影でも見たのだろう。Atlantic Records が Ruthie 獲得に動き出した。ところが彼女はその話を曖昧にしたまま、さらに自身が追い求めるルーツ・ミュージックを極めるためか、母親の病をわずらったこともあったのだろう 93 年に New York を後にし、Texas へと舞戻った。

Ruthie Foster はローカル・テレビ局での職を得、一旦はミュージシャンとしての生活から離れるものの 97 年、自主制作でアルバム『Full Circle』を発表 (同作品は 01 年に再発売されている)。ブルー・コーン・ミュージックと契約を交わし 99 年『Crossover』、02 年『Runaway Soul』、04 年にライブ・アルバム『Stages』、07 年『the Phenomenal Ruthie Foster』、08 年『the Phenomenal Ruthie Foster/Stages』、09 年『the Truth According to Ruthie Foster』へと至っている。

アルバムからマイアミ・ソウルを想像していたわたしが、Ruthie Foster のライブ・パフォーマンスを観ていると、それよりもずっとゴスペルを含めたフォーク・ミュージックの影響が強いことがわかる。彼女はショウの間、ルーツ・ミュージックを散りばめながら進行している。そしてわたしたちをぐいぐいと「深い」ところへと連れて行くのだ。

北村和哉